

仕合わせの和

第206号
令和元年. 5. 1
(毎月1日発行)

物の「いのち」に感謝

住職 谷川寛俊

真成寺では、毎食前には必ずお題目を三唱して、「いただきます」と唱和してから頂戴しています。また、毎月のお講のお参りには参詣者の皆さんと共に「食法(じきほう)」をお唱えしてから戴いていきますよね。特に感心するのは、三番目の孫・彩桜花(いろは4歳)は可愛らしい合掌の姿で1番大きな声を出して唱えます。たまに外食に出掛けたときなんかは、周囲の目を気にする事なく、一際(ひととき)大きな声で唱えます。ご承知のように、私達は食物の「いのち」を頂いて生かされています。

過日、友人から「物の命」ということについて、改めて考えさせられるお話を伺いました。

Aさんという屠殺場(とさつじょう)で、牛を殺す役目の方のお話です。Aさんは牛を殺す時、必ず牛と目が合うというのです。その度に「いつか、この仕事をやめよう」と思うそうです。ある日の夕方、牛を

乗せた一台のトラックがやってきた。「明日の牛か」と思ったそうです。しかし、いつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思ったAさんは荷台を覗いてみると、十歳くらいの女の子が牛のお腹をさすりながら何か話しかけている。その声に耳を澄ませていると、聞こえてきた言葉に驚いた。それは、「みいちゃん、ごめん。みいちゃんゴメンね。」と言う、か細く悲痛な祈りにも似た声だったのです。Aさんは見なければ良かった。と頭を抱えていると、女の子のおじいさんがAさんに頭を下げてこう言った。「みいちゃんは、孫のこの子と一緒に育ってきました。だけん、ずっとうちに置いておくつもりでした。ばつてん、みいちゃんば売らんと、お正月が来んとです。明日は宜しく願います」と。Aさんは「もう出来ん」と思った。そして、明日の仕事を休むことにした。家に帰ってからその事を小学生の息子に話をしました。息子さんはジッと聞いていた。そして息子さんはAさんに言いました。「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」と。翌朝、仕事は休む事になっていたAさんに向かって、息子さんが「お父さん、今日は行かなんよ！」

と叫ぶような声で言葉を投げかけてきた。その言葉にAさんの心が揺れ動いた。気づけばAさんは仕事場に車を走らせていた。間もなく牛舎に到着。他の牛がそうであるように、みいちゃんも角を下げて威嚇するポーズを取った。Aさんは声を掛けた。「みいちゃん、ごめんよ。みいちゃんが肉にならんと皆が困るけん。ごめんよ。」と。そう言ううと、みいちゃんはAさんに首をこすりつけてきたというのです。殺す時、動いて急所を外すと牛は苦しむ。「みいちゃん。じつとしとけよ。じつとしとけよ」と言ううと、みいちゃんは動かなくなつた。次の瞬間、みいちゃんの中から大粒の涙がこぼれ落ちた。Aさんは、この時はじめて牛の涙を見た。衝撃を受けた。「物」だと勘違いしていた自分の心を恥じた。牛も私達と同じ尊い命を持つ生き物だと痛感した。

この話を知った助産師の女性は次のように話しています。「私達は奪われた命の意味も考えずに毎日のように、肉やお魚を頂戴しています。自分が直接手を汚すこともなく、Aさんのような方々の悲しみも、苦しみも知らず、肉

真成寺ホームページ
<https://bit.ly/2Gz55Mz>
編集・発行 玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

を食べています。「いただきます」。「ごちそうさま」も言わずにご飯を食べることは、私達には許されないことです。感謝しないで食べるなんて許されないことです。食べ残すなんて、もつての外です」と。私達は、本当の意味で感謝をして食事(命)を頂戴しているでしょうか？
今一度、自分に問い掛け直してみたいと思います。

